

第43章

3 ニーファイ 18 - 19 章

はじめに

ニーファイ人を訪れられたとき、救い主は聖餐^{せいさん}を設けられ、聖餐の目的は救い主を覚えることであると強調された。次のように約束しておられる。「あなたがたは、いつもわたしを覚えているならば、わたしの御霊^{みたま}を受けるであろう。」(3 ニーファイ 18:11) これと同じ約束が聖餐の祈りに含まれている。3 ニーファイ 18 - 19 章を学ぶときに、次のことについて深く考える。イエスは聖餐と祈りについて何を教えただろうか。また、これらの教えが、キリストの良い弟子であろうと努力し、さらに十分に聖霊の導きを受けるためにどのような助けとなるだろうか。

注解

3 ニーファイ 18:1 - 14 「あなたがたは、……記念して、これを行いなさい」

● 救い主は、聖餐を取る第一の目的は主を覚えることであると教えられた。聖餐式の間、神の御子に心に向ける機会が与えられているので、ほかのことを考えたり気を散らしたりしないようにすべきである。十二使徒定員会のジェフリー・R・ホランド長老は、聖餐を通して聖約を更新する間、主を覚える幾つかの適切な方法について語っている。

「救い主が前世でなされたこと、……を思い起こすことができます。……」



若い女性……のもとに、主がお生まれになったという偉大な出来事を思い起こすこともできます。……

キリストの奇跡や教え、癒しや助けを思い起こすこともできます。……

……イエスが子供たちに特別な喜びを見いだされ、わたしたち皆に、……子供たちのようになりなさいとおっしゃったことを思い起こすこともできます。

キリストが弟子たちを友と呼ばれたことを思い起こすこともできます。……

わたしたちは人生で経験するすばらしい事柄を、そして『善いものはすべてキリストから来る』(モロナイ 7:24) ことを思い起こすことができますし、またそうすべきです。……

あるいは、イエスが受けられた不親切、拒否、……主が堪

え忍ばれた不正を、……思い起こすことでしょう。……

……イエスが至高の座に着かれる前に、すべてのものの下にまで身を落とされたこと、また、心を憐れみ^{あわれみ}で満たし、民を彼らの弱さに応じて救う方法を知るために、あらゆる苦痛と苦難と試練を受けられたことを思い起こすこともできます。』(『聖徒の道』1996年1月号、73 - 74 参照)

3 ニーファイ 18:6 - 7 聖餐^{せいさん}と天使の働き

● 十二使徒定員会のダリン・H・オークス長老は、天使の教えと導きもまた聖餐の祈りで約束されていることの一部となっていることについて説明している。

「これらのアロン神権の儀式は、天使の働きにとっても重要なものです。……」

……天使のメッセージは声、あるいは心に浮かぶ考えや感じという形でも伝えられる場合があります。……

……多くの場合、天使の働きかけは、視覚よりも感情や聴覚として伝えられます。……

一般的に、霊的な導きと交わりという祝福は、清い人しか受けることができません。……わたしたちはバプテスマと聖餐というアロン神権の儀式を通して、自分自身の罪から清められ、戒めに従うなら常に主の御霊^{みたま}の導きを受けられるとの約束を授けられるのです。わたしは、その約束は聖霊だけでなく天使の働きのことも述べていると信じています。なぜなら『天使は聖霊の力で語る。したがって、天使はキリストの言葉を語る』からです(2 ニーファイ 32:3)。ですから、アロン神権者は、ふさわしい状態で聖餐を受けるすべての教会員に対して、主の御霊と天使の働きの導きを受けるための扉を開くのです。』(『リアホナ』1999年1月号、42 - 43 参照)

3 ニーファイ 18:16, 24 「わたしはあなたがたのために模範を示した」

● 十二使徒定員会のニール・A・マックスウェル長老(1926 - 2004年)は、どのような役割を与えられているのであれ、救い主の属性を身に付けるために最善を尽くすことがわたしたちの務めであると勧告している。

「わたしたちは一人一人が家庭、教会、地域社会、企業、教育などにおいて異なる役割を果たしている。わたしたちが必要としていることは様々であるが、わたしたちのだれもが必要としていることがある。それはキリストのあらゆる特質、特に、わたしたちが個人として何よりももっと十分にはぐくまなければならない特質に心に向けることである。……」

もちろん、救い主が示された技術をごくわずかだけ身に付

けるにとどまることもできる。しかし、全力を尽くして救い主を見習わなければ、偉大な模範から学ぶ機会を失ってしまうことになる。さらに、わたしたちは行動的な面でも本質的な面でも救い主を見習うべきである。例えば、神はわたしたちを愛するがゆえに、わたしたちの祈りに必ず耳を傾けられる。わたしたちに耳を傾けられない神を想像できるだろうか。あるいは力に欠けた神を想像できるだろうか。あるいは原則について語るときに自信のない神を想像できるだろうか。救い主に似た者となればなるほど、その変化は属性と行動の両面で起こるものである。」(A Wonderful Flood of Light [1990 年], 110)

3 ニーファイ 18:18 「常に目を覚ましていて祈らなければならない」

・大管長会のヘンリー・B・アイリング管長は、「いつも御子を覚え」ること(教義と聖約 20:77, 79)と「常に……祈[る]」(3 ニーファイ 18:18)ことの大切さについて振り返っている。

「救い主がわたしたちに『常に祈る』ようにと警告しておられるのはどのような意図があつてのことなのでしょう。

主がどのような意図の下に、いつも主を覚えるという聖約をお与えになったのか、また、誘惑に打ち負かされないために常に祈らなければならないと警告されたのか、完全に理解できるほどの知恵はわたしにはありません。でも、一つだけは理解しています。それは、わたしたちに影響を与える強力な勢力と、人間が持っている性質について、主はすべて御存じだということです。……

……主はわたしたちを悩ます世の煩悩がどのようなものか御存じです。……また試練に対処する人間の能力がどれほど変わりやすいかも御存じです。……

……周囲で悪の勢力が勢いを増すにしたがい、かつては十分であったどんな霊的な力も十分ではなくなります。逆に、かつては可能であると考えた限界を超える霊的な成長に手が届くようになります。霊的な力の必要性もそのような力を身に付ける機会とともに、思いがけず急速に増大するでしょう。わたしたちはその比率を過小評価するという危険を冒しています。……

まず、主を覚えることです。人は、理解し、愛しているものを忘れないものです。……

主はあなたの心の祈りを聞いておられます。変わらぬ心の思い、天の御父とその愛する御子への愛の思いがあるならば、あなたの祈りは常に天へと昇ることでしょう。」(“Always” [ヤングアダルト対象の CES ファイヤサイド,

1999 年 1 月 3 日], 2-3, 5。「いつも救い主を覚える」『リアホナ』2005 年 12 月号, 9-10 も参照)

3 ニーファイ 18:18 「あなたがたを小麦のようにふるいにかける」

・「サタンはあなたがたを小麦のようにふるいにかけることを願っているからである」(3 ニーファイ 18:18)とニーファイ人に警告されたとき、イエスが教えておられたメッセージは、ペテロにお伝えになったメッセージと同じだった(ルカ 22:31 参照)。



© リチャード・クリーン

十二使徒定員会のブルース・R・マッコンキー長老(1915-1985 年)は、イエスの言葉について次のように説明している。「これは今日の^{こんにち}の人々にとっては分かりにくい^が、当時の人々にとっては明白な慣用表現であった。意味内容としては要するに、イエスはこう言っておられるのだ。『ペテロ、サタンはあなたを捕獲したいと望んでいる。サタンはあなたを刈り入れ、自分の穀物倉に運び込み、そこであなたを自分の弟子にしたいのだ。』畑はすでに白くなり、刈り入れを待っている、また、出て行って福音を^の宣べ伝え、人の魂を刈り入れるという言い方をするが、そのときに用いる^ひ比喩と同じである。そう、サタンはペテロを欲しがっていた。ペテロを小麦のようにふるいにかける、すなわち、その魂を刈り入れることを願っていたのである。」(Sermons and Writings of Bruce R. McConkie, マーク・L・マッコンキー編 [1998 年], 127)

3 ニーファイ 18:18-21

ここでイエスは祈りを改善するどのような教えを与えておられるか。

3 ニーファイ 18:21 「家族の中で……祈[る]」

・ゴードン・B・ヒンクレイ大管長(1910-2008 年)は、家族の祈りの大切さについて次のように語っている。「父親と母親、そして子供たちがともにひざまずいて朝な夕なにささげる祈りに勝るものはありません。厚いじゅうたんやきれいなカーテン、美しく彩られた壁や家具にも増して麗しく、優れ

た家庭を築くために必要なものは、家族の祈りなのです。」
 (『聖徒の道』1991年9月号, 4)

3 ニーファイ 18:26 – 32 神聖な儀式

• 3 ニーファイ 18:26 で、救い主が群衆に話すのをおやめになり「御自分が選ばれた」指導者の方を向かれたことに注目する。28 節から 29 節のメッセージは、ふさわしくない人を聖餐にあずからせることに対する警告として神権指導者に与えられた。この聖句から、聖餐を取る資格があるかどうかを判断する責任は、そのような判断を下すよう主が召された人たち、例えば、ビショップあるいはステーク会長にゆだねるべきである、ということをおわたしたち教会員は学ぶ。



• ジョン・H・グローバーク長老は、七十人定員会会員で奉仕をしているとき、ふさわしい状態で聖餐を取ることを意味について次のように説明している。

「もし(悔い改めて)進歩したいと願い、神権系統の指導者から聖餐を取ることを制限されていなければ、わたしたちはふさわしいと思います。しかし、もし進歩しようとせず、御霊の導きに従おうとしていなければ、次のように自問する必要があります。自分は聖餐を受ける資格があるだろうか、個人の悔い改めと進歩を促すという聖餐のほんとうの目的を、無にしているだろうか。救い主を常に忘れず、わたしたちのためにしてくださったこと、あるいはしてくださることをすべて思い起こすならば、わたしたちは行いを正して主に近づき、永遠の生命に至る道を歩めるでしょう。

しかし、悔い改めも進歩することも拒み、主を忘れて戒めを守らなければ、わたしたちの成長は止まり、身も霊も救いを受けることができないでしょう。

聖餐はきわめて個人的なものですから、ふさわしいかどうかは、自分がよく知っています。……

ふさわしい状態で聖餐を取ると、改善する必要のある事

柄に気づき、それを行う決意をし、助けを得ることができません。どのような問題を抱えていようと、聖餐は常に希望を与えてくれるのです。

そうした問題の多くは、自分で解決しなければなりません。例えば、什分の一を納めていなければ、納める決意をするのです。しかし、問題によっては、ビショップに話さなければなりません。その判断は御霊が教えてくれます。」(『聖徒の道』1989年7月号, 41 – 42)

3 ニーファイ 18:36 – 37 イエスはその弟子たちに「聖霊を授ける力」をお与えになった

• 救い主が弟子たちに触れ語られたときに何をし、何を言われたのか群衆には分からなかった。しかし、モルモンの言葉から、弟子たちが次のように証していることが分かる。「弟子たちは、聖霊を授ける力をイエスから授けられた……。」(3 ニーファイ 18:37) モロナイは、後にこの出来事とキリストが十二弟子に語られた言葉を明らかにすることで、読者に対する彼の父親の次の約束を果たした。「わたしはこの証が真実であることを、後にあなたがたに示そう。」(3 ニーファイ 18:37) モロナイはさらに、救い主は権能を与えるため弟子たちに御自身の手を置かれたと説明している(モロナイ 2:1 – 3 参照)。

3 ニーファイ 19:6 – 8, 16 – 17

可能ながざりひびまずくことが
 祈りの重要な要素であるのはなぜだと思うか。

3 ニーファイ 19:9 弟子たちは聖霊を求めて祈った

• イエスが選ばれた十二弟子は「聖霊が授けられるように」祈った(3 ニーファイ 19:9)。ブルース・R・マッコンキー長老は、この願いの背後にどのような意味があるか説明している。

「聖霊の賜物と聖霊を受けることとの間には……違いがある。バプテスマを受けた聖徒は皆、御霊による清めの力を受ける賜物または権利を授かる。しかし、実際に約束された報いを受けるのは、ふさわしい者、戒めを守っている者だけである。教会の会員は、実のところ、御霊の導きをいつも受けるわけではない。それが受けられるのは、従順によって、無限の御方と心を調和させるときだけである。

聖霊の賜物を実際に受けることは、人間がこの地上で受けられる最高の賜物である。この賜物を受けるという事実

は、そのような祝福を受ける聖徒は神と調和しており、次の世界における永遠の命を確実なものとする行いをしているという証である。」(A New Witness for the Articles of Faith [1985 年], 257)

• ヒーバー・J・グラント大管長 (1856 - 1945 年) は、^{きよ}聖い御霊の導きを求めて日に 2 度、神に祈り求めることについて語っている。「わたしは、神の御霊の導きを求めて日に 2 度、真心から神に祈りをささげる少年や少女、若い男性や若い女性についてほとんど心配していません。誘惑が来ても、与えられる靈感によってそれを克服する力を彼らは持つことができると確信しているからです。神の御霊の導きを求めて主に祈りをささげるときに、わたしたちの周囲に防護壁が築かれるのです。熱心に真心から主の御霊の導きを求めるときに、それが与えられるということを、わたしは皆さんにはっきりと申し上げます。」(Gospel Standards [1976 年], 26)

• 大管長会第二顧問のマリオン・G・ロムニー管長 (1897 - 1988 年) は、わたしたちは簡単な 4 つの事柄を実行することによって、御霊を得、その御霊を保ち続けることができると述べている。「御霊の導きを得て、その導きを保ち続けたいと思うならば、以下の簡単な 4 つの事柄を実行することです。1 番目は、祈ること。それも熱心に祈ることです。……2 番目は、福音を学び研究すること。3 番目は、義になった生活をする。すなわち罪を悔い改めることです。……4 番目は、教会で奉仕することです。」(『聖きみたまの導き』『聖徒の道』1980 年 8 月号, 5 参照)

3 ニーファイ 19:10 - 13 バプテスマを受けて新たになる

• ジョセフ・フィールディング・スミス大管長 (1876 - 1972 年) は、イエスがニーファイ人にもう一度バプテスマを受けるよう命じた理由を説明している。

「キリストはこの大陸の^{ゆる}ニーファイ人を訪れたとき、ニーファイ人がすでに罪の赦しのためにバプテスマを受けていたにもかかわらず、彼らにバプテスマを受けるように命じられた。……救い主が、ニーファイとその民に再びバプテスマを受けるように命じられたのは、救い主が福音の下に教会を新たに組織されたからである〔3 ニーファイ 19:7 - 15; 26:17 参照〕。それ以前の教会は律法の下に組織されていた〔3 ニーファイ 9:15 - 22; 11:10 - 40; 12:18 - 19; 15:4 - 10 参照〕。

……1830 年 4 月 6 日以前にバプテスマを受けていたジョセフ・スミスをはじめとする人々は、同じ理由で、教会が組織された日に、再びバプテスマを受けた。」(Doctrines of Salvation, ブルース・R・マッコンキー編, 全 3 巻 [1954

- 1956 年], 第 2 巻, 336)

3 ニーファイ 19:18, 22 「彼らは……イエスに向かって祈った」

• 「わたしたちはイエスに祈らなければならない」とは聖典のどこにも書かれていない。しかし、ここで弟子たちは例外的に、御父ではなく御子に祈りをささげた。ブルース・R・マッコンキー長老は、そのようなことが起こった理由を次のように説明している。「そのときそのようなことが一度だけ行われたのには特別な理由があった。イエスはニーファイ人に、御自分の名前で御父に祈るようすでに教えておられた。ニーファイ人にとって、そのように祈ることは初めての経験だった。……イエスは御父の象徴として彼らの前におられた。彼らがイエスを見るとき、それはあたかも御父を見るようであった。彼らがイエスに祈るとき、それはあたかも御父に祈るようであった。それは特別で他に類のない状況だった。」(The Promised Messiah: The First Coming of Christ [1978 年], 560 - 561) もう一つ注目すべきことがある。民が自分に祈っている理由を救い主御自身が次のようにはっきりと述べておられるのである。「わたしが彼らとともにいるので……」(3 ニーファイ 19:22)。さらに、「彼らは言葉数を多くしたのではない。祈るべき事柄が彼らに示され……たからである。」(3 ニーファイ 19:24)

3 ニーファイ 19:19 - 20, 27 - 28 「父よ……感謝いたします」

• 救い主が御父に感謝の思いを示された例は、聖典の至る所に記されている(マルコ 14:23; ヨハネ 6:5 - 11; 11:33 - 35, 41; 1 コリント 11:23 - 24 参照)。ニーファイ人への 2 度目の訪問のために戻られるとすぐに、イエスは聖典に記されている最初の祈りと 2 度目の祈りをささげられた。その祈りは御父への感謝で始まった(3 ニーファイ 19:19 - 20, 27 - 28 参照)。十二使徒定員会のロバート・D・ヘイルズ長老はこの原則を強調している。

「祈りは、天の御父への感謝の思いを伝えるうえで欠かすことのできないものです。天の御父はわたしたちが朝に夜に、誠実で飾ることのない、心からの祈りを通して、多くの恵み、^{たまもの}賜物、才能に感謝の思いを示すように望んでおられます。

祈りによって感謝とお礼の気持ちを表すのは、知恵と知識のすばらしい源、すなわち父なる神とその御子、主にして救い主なるイエス・キリストへの信頼を示すことでもあります。」(『聖徒の道』1992 年 7 月号, 68)

3 ニーファイ 19:20 - 23, 29 一つとなるための祈り

• イエスは、弟子たちが一つとなるように、また、弟子たちか

ら教えを受ける人たちが一つとなるように天の御父に祈られた (ヨハネ 17:11, 20-21 参照)。キリストは教義と聖約でも一致の原則を教えられた。「一つとなりなさい。もしもあなたがたが一つでなければ、あなたがたはわたしのものではない。」(教義と聖約 38:27)

イエス・キリストは 3 ニーファイ 19:20-23 とヨハネ 17:11, 20-23 で一つとなるための祈りをささげておられるが、ジェフリー・R・ホランド長老は、この二つの祈りを比較している。「モルモン書では、救い主の言葉から、このような一致をもたらしてくれるのは聖霊であることがはっきりと理解できる。教義上のこの点が新約聖書の記録からははっきりと伝わってこない。さらに、重要なことは、それが、神会を信じていることを神に示す証^{あかし}になっているのである。神はわたしたちが祈る



ところを見、聞いておられるのである。キリストはニーファイ人のためにこの証拠を指摘され、御父にこう言われた。『彼らが祈るのをお聞きになってお分かりのように、彼らはわたしを信じています。』[3 ニーファイ 19:22] ……このことこそが天の奇跡的な現れと聖なる慰め主からの個人的な導きの鍵^{かぎ}となるのである。』(Christ and the New Covenant [1997 年], 280)

・十二使徒定員会の D・トッド・クリストファーソン長老は、わたしたちがどうすれば御父そして御子と一つになることができるか説明している。

「イエスは御自分の肉も霊も御父の御心^{みこころ}に従わせることで、御父と完全に一致されました。イエスは、弱められたり悩まされたりする心の乱れとはまったく無縁でいらしたので、その生涯は、常に一つのことに焦点が定まっていました。イエスは天の御父に関して触れ、このように語られました。『わたしは、いつも神のみこころにかなうことをしている……。』(ヨハネ 8:29) ……

確かに、わたしたちは神とキリストの御心^{おふたかた}と関心事を自分たちの最大の望みとしなにかぎり、御二方と一つになることはできません。そのような従順は一日で達成できるものではありません。しかし、もしわたしたちが望むのであれば、御父が主の内におられるように、主がわたしたちの内にもおられると、間違いなく言えるようになるまで、主は聖なる御霊^{みたま}を通してわたしたちを導いてくださいます。そのためにはどの

ようなことを求められるのだろうかと考ええると、恐ろしくなることがあります。しかし満ちみちる喜びを得るには、この完全な一致によらなければならないことを知っています。』(『リアホナ』2002 年 11 月号, 72-73)

3 ニーファイ 19:24 「彼らは言葉数を多くしたのではない」

・祈りながらも「言葉数を多くしたのではない」とはどういう意味だろうか (3 ニーファイ 19:24)。七十人のジーン・R・クック長老は次のような洞察を与えている。

「ニーファイ人の弟子たちはイエスの前で祈っていたとき、わたしたちすべてにとって良い模範を示してくれました。記録にはこうあります……。『彼らは言葉数を多くしたのではない。……』

これは主がこの地上で教え導かれたときにユダヤ人に与えられた戒めと一致しています。主はこう言われました。『また、祈る場合、異邦人のように、くどくどと祈るな。彼らは言葉かずが多ければ、聞きいれられるものと思っている。』(マタイ 6:7。3 ニーファイ 13:7 も参照)

公の場で祈るときには、人の誉れを得たいという望みに押し流されないよう注意しましょう。そのような状態だと、本心からではなく祈ったり必要以上に長く祈ったりすることがあるからです。ただ主に聞いてもらうためではなく、人に聞いてもらうために祈る人も注意する必要があります。『美辞麗句を連ねた』祈りや人々を感心させる祈りは避けるようにいつも注意しなければなりません。主はそのような祈り方をお喜びになりません。確かに、主は御自分に心を向けない人、あるいは本心からでなく祈る人の祈りにはお答えになりません。』(Receiving Answers to Our Prayers [1996 年], 43-44)

3 ニーファイ 19:24-25。

これらの聖文を読み、弟子たちに何が起こったと思うか。あなたの答えを 3 ニーファイ 19:28-29 ならびにモーセ 1:9 と比較する。

3 ニーファイ 19:35 奇跡は信仰を持つ人々に訪れる

・救い主がモルモン書の時代の聖徒を訪れられたときに、数々の偉大な奇跡が起こった。癒^{いや}しの奇跡、天使、照らされる顔、書き記すことができないほど神聖な祈り、そのほかにも多くの驚くべき現れがあった。イエスは弟子たちにこう宣

言された。「わたしはすべてのユダヤ人の中で、これほどの深い信仰を見たことがない。わたしは、彼らの不信仰のゆえに、このように大きな奇跡を彼らに現すことができなかった。」(3 ニーファイ 19:35)

奇跡は今日でも起こるのだろうか、あるいは奇跡の時代は終わったのだろうか。ダリン・H・オックス長老は、奇跡は今でも起こっているが、その神聖さのゆえに耳にすることは少ないと教えている。

「総大会や地元の集会で話すときに、わたしたちが自分たちの見た奇跡についてあまり話さないのはなぜでしょうか。わたしたちが経験する奇跡のほとんどは、ほかの人と分かち合うべきではありません。聖典に書かれている教えに従い、それらを神聖に保ち、御霊の促しがあったときにのみ分かち合います。……

……近代の啓示は次のように指示しています。『彼らはこれらのことを自慢してはならないし、世の人々の前でこれらを語ってもならない。これらのことはあなたがたの益のために、また救いのために、あなたがたに与えられるからである。』(教義と聖約 84:73) 別の啓示は次のように宣言しています。『上から来るものは神聖であり、それについては注意して、御霊の促しによって語るようにしなければならないことを覚えておきなさい。』(教義と聖約 63:64) ……

末日聖徒は、通常、これらの指示に従っています。証をするとき、また、公の場で説教をするときに、自分にとってきわめて奇跡的な経験について触れたり、福音が真実であるというしるしに頼ったりすることはめったにありません。普通は、回復された福音が真実であることについて証を確認するだけで、その証をどのようにして得たか詳細に話すことはほとんどありません。どうしてでしょうか。しるしは信じる者

に伴うものだからです。人を改宗させるのに奇跡を求めるのは、不適切な目的でしるしを求める行為です。同様に、霊的な成熟の度合いが非常に異なる人々から成る一般の聴衆に対し奇跡的な出来事について話すのは不適切なことが多いのです。一般の聴衆に話す場合、奇跡は信仰を強めることでもあります。不適切なしるしとなることもあるということです。』(“Miracles” [ヤングアダルト対象の CES ファイヤサイド, 2000 年 5 月 7 日], 3, www.ldsces.org)

理解を深めるために

- バプテスマを受けたときの気持ちを思い起こすことで、次に聖餐せいさんを取るときの経験がどのように改善されるだろうか。
- 弟子たちは「自分たちが最も望んでいるものを求めて」すなわち「聖霊が授けられるように」祈った(3 ニーファイ 19:9)。あなたが最も望んでいるものは何だろうか。あなたは自分の望みを祈りの中に入れているだろうか。入れる理由、または入れない理由は何だろうか。
- 救い主は弟子たちに「ほほえみかけ」られた(3 ニーファイ 19:25, 30)。これはどういう意味だと思うか。どうすればあなたも周囲の人々にほほえみかけることができるだろうか。

割り当ての提案

- 聖餐せいさんについて幾つかの聖文と教えを読んだ今、聖餐を自分の人生にとってさらに有意義なものとするための計画を立てる。
- 3 ニーファイ 19:19 - 23, 27 - 29, 31 - 32 の救い主の祈りに関する説明を研究する。これらの説明から祈りの改善について学べる原則について深く考える。あなたの見解や結論を日記に記録する。